伯夷列伝　解答

A　語句の意味と読み

(1)　位牌（死者の名を書いて、その霊をまつる木の札）。ここでは亡くなった父・西伯（文王）の位牌。　／★武王は父の位牌を車に載せて出陣した。「父の葬式もすませていない」という伯夷・叔斉の批判につながる

(2)　意味＝（馬の手綱を）引きとめて。読み＝ひかえて。　／★「たたく」の意味ではない。「控ふ」と同じで、進もうとする馬を引きとめること

(3)　盾と矛。転じて、武器・戦争。ここでは武王が紂を討つ戦い。　／「干」＝たて、「戈」＝ほこ。現代仮名遣いでは「かんか」

(4)　臣下が主君を（子が親を）殺すこと。　／★ただの「殺す」ではない。目下の者が目上の者を殺すときにだけ使う字

(5)　武器で殺す（斬り殺す）。　／名詞の「兵（＝武器）」を動詞として使っている。「兵せんと欲す」＝斬り殺そうとする

(6)　穀物・食べ物。ここでは周の国の穀物、周から受ける食べ物（俸禄）。　／もとは「あわ」のこと。転じて穀物全体や、主君から受ける扶持（ふち）をいう

(7)　意味＝若死にすること。読み＝そうよう。　／★「蚤」は「早」と同じ。「夭」は年若くして死ぬこと。「卒に」は「とうとう・最後には」

B　句法

(8)　再読文字。「なんぞ〜ざる」と読み、「どうして〜しないのか（〜すればよいではないか）」の意。ここは「行って身を寄せようではないか」。　／★一字で「何不（なんぞ〜ざる）」の二字ぶんの働き。一度目は「なんぞ」、下から返って二度目に「ざる」と読む

(9)　反語。「孝と言えようか、いや、言えない」。　／★白文は「可謂孝乎」。「可謂〜乎（〜と謂ふべけんや）」＝「〜と言えようか、いや言えない」。「べけ」は「べし」の未然形。後の「仁と謂ふべけんや」も同じ形

(10)　再読文字。「まさに〜んとす」と読み、「今にも〜しようとする」の意。　／★「将」と同じ働き。後半の「且（か）つ七十子の徒」の「且」は一度だけ読む「かつ（そのうえ・また）」で、再読文字ではない

(11)　置き字。「兮」は歌（詩）の中で、句の調子をととのえるために使われる。　／「矣」は文末で言い切りや詠嘆の気持ちをそえる字だが、訓読では読まない

(12)　「無親」＝レ点（「無」にレ点）。「与善人」＝一・二点（「与」に二点、「人」に一点）。　／★一字だけ返るときはレ点、二字以上へだてて返るときは一・二点。「善人」を読んでから「与」に返る

(13)　疑問（どちらかを問う形）。「正しいのか、正しくないのか」の意。　／★「邪」は文末で疑問・反語を表す助字（「耶」「乎」と同じ）。「A邪B邪」＝「AかBか」。答えを出さずに問いのまま結び、天道への強い疑いと嘆きをこめている。二つのうちどちらかを問う形なので「選択疑問」と呼ぶこともある。呼び方はお使いの教科書に合わせる

C　主語・指す内容

(14)　西伯昌（のちの周の文王）。西伯昌が老人をよく大切にすると聞いたから。　／本文の「西伯昌善く老を養ふと聞き」が理由。着いたときには西伯はもう亡くなっていた

(15)　臣＝武王（殷に仕える周の君主）。君＝殷の王の紂。　／★周はもともと殷に仕える国。だから武王が紂を討つことは「臣下が主君を殺す」ことになる

(16)　左右＝武王のそばに仕える家来たち。之＝伯夷・叔斉。　／「左右」は、主君の左と右にひかえる者＝側近

(17)　言ったのは太公（太公望）。「此」＝伯夷・叔斉。　／太公はこう言って、二人を助けて立ち去らせた（「扶けて之を去らしむ」）

(18)　はじめの「暴」＝武王の暴力（臣下が武力で主君を討つこと）。あとの「暴」＝殷の紂の暴政。　／★「Aを以てBに易ふ」＝「AでBを取りかえる」。武王は紂の暴政を、自分の武力という暴虐で取りかえたにすぎない、という批判

D　口語訳

(19)　父が亡くなって（まだ）葬りもしないうちに、すぐに戦を始める。これを孝と言えようか、いや、言えない。

(20)　（武王は）暴力によって（紂の）暴政に取りかえ、そのまちがいに気づかない。

(21)　神農・虞・夏の（理想の）世は、たちまち消え去ってしまった。私はいったいどこに身を寄せたらよいのか（身を寄せる所などない）。　／★「安（いづ）くにか〜ん」＝「どこに〜しようか」。疑問とも反語ともとれる。「どこにも行く所がない」という嘆きをこめて訳す。お使いの教科書の訳し方に合わせる

(22)　天の道はえこひいきをせず、いつも善人に味方する。　／★「親」＝身内びいき、「与す」＝味方する・仲間になる

伯夷列伝　解答／現代語訳

E　内容・記述

(23)　武王は父の葬儀もすませずに戦をし、臣下の身で主君の紂を討って天下を取った。二人はこれを孝にも仁にもそむくと考え、そのような周の世で養われることを恥じて、節義を守ろうとしたから。　／★答えの軸は「不孝（父を葬らずに戦う）」と「不仁（臣が君を殺す）」の二つ。二人がいさめた言葉の中にある

(24)　盗蹠。毎日罪のない人を殺し、乱暴で勝手気ままにふるまい、数千人の仲間と天下をあばれまわった大悪人なのに、最後は天寿をまっとうして死んだ。　／「竟に寿を以て終はる」＝結局、天寿をまっとうして死んだ。若死にした善人の顔淵との対比

(25)　天は常に善人に味方すると言われるのに、善人の伯夷・叔斉は餓死し、学問好きの顔淵は貧しく若死にし、悪人の盗蹠は天寿をまっとうしたから。　／★「善人が報われない例（伯夷・叔斉、顔淵）」と「悪人が栄える例（盗蹠）」の対比が答えの軸。筆者自身が理不尽な刑（宮刑）を受けたことと重ねて読む見方もある

F　文学史・思想

(26)　司馬遷／前漢（武帝のころ）。　／★自分のことを「太史公」と呼んで評を書いている。本文の「余」も筆者自身

(27)　紀伝体／「列伝」の最初（列伝第一）。　／★年代の順に出来事を書く「編年体」と区別する。『史記』は全百三十巻で、そのうち「列伝」が七十巻

(28)　『老子』（第七十九章）。　／筆者は、世間で信じられているこの言葉をまず示し、伯夷・叔斉らの例をあげて、それに疑問をぶつけている

【現代語訳（全文）】

伯夷と叔斉は、孤竹国の君主の二人の息子であった。（中略）
そこで伯夷と叔斉は、西伯昌が老人をよく大切にすると聞いて、「どうして行って身を寄せないのか（行って身を寄せようではないか）」と（考えた）。ところが着いてみると、西伯は亡くなっていた。（子の）武王は、（父の）位牌を車に載せ、（父を）文王と呼んで、東方の紂を討ちに向かった。伯夷と叔斉は、（武王の）馬を引きとめていさめて言った、「父上が亡くなって葬りもしないうちに、すぐに戦を始める。これを孝と言えましょうか（いや、言えません）。臣下の身でありながら主君を殺す。これを仁と言えましょうか（いや、言えません）」と。（武王の）側近たちは二人を斬り殺そうとした。（すると）太公が「この人たちは正義の人だ」と言い、二人を助け起こして立ち去らせた。

武王が殷の乱を平定すると、天下の人々は周を主君としてあおぐようになった。しかし伯夷と叔斉はこれを恥とし、正義をつらぬいて周の穀物を食べず、首陽山に隠れ住み、わらびを採って食べていた。飢えて今にも死にそうになったとき、歌を作った。その歌の言葉は、「あの西の山に登って、そこのわらびを採る。（武王は）暴力によって（紂の）暴政に取りかえ、そのまちがいに気づかない。神農・虞（舜）・夏（禹）の（理想の）世は、たちまち消え去ってしまった。私はいったいどこに身を寄せたらよいのか（身を寄せる所などない）。ああ、もう死んでゆこう。私の運命も尽きてしまったのだなあ」と。こうして二人はとうとう首陽山で餓死した。
（中略）
ある人は、「天の道はえこひいきをせず、いつも善人に味方する」と言う。伯夷・叔斉のような人は、善人と言える者なのか、そうでないのか（もちろん善人である）。これほど仁徳を積み、行いを清らかにしながら、餓死したのだ。また、孔子の七十人あまりのすぐれた弟子のなかで、孔子はただ顔淵だけを学問好きだと推した。それなのに顔回はたびたび米びつが空になるほど貧しく、酒かすや米ぬかのような粗末な食べ物さえ腹いっぱい食べられず、とうとう若死にしてしまった。天が善人に報いるというのは、いったいどういうことなのか。（一方）盗蹠は、毎日罪のない人を殺し、人の肉をなますにして食らい、乱暴で勝手気ままにふるまい、数千人の仲間を集めて天下をあばれまわったのに、結局は天寿をまっとうして死んだ。これはいったいどんな徳に従った（報いな）のか。これらは、（天道のあやしさが）とりわけはっきりと目立つ例である。
（中略）
私はひどく迷ってしまう。もしかすると、いわゆる天道というものは、正しいのか、正しくないのか。

▸ 漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/kanbun-sankousho/　　▸ 解説記事にもどる